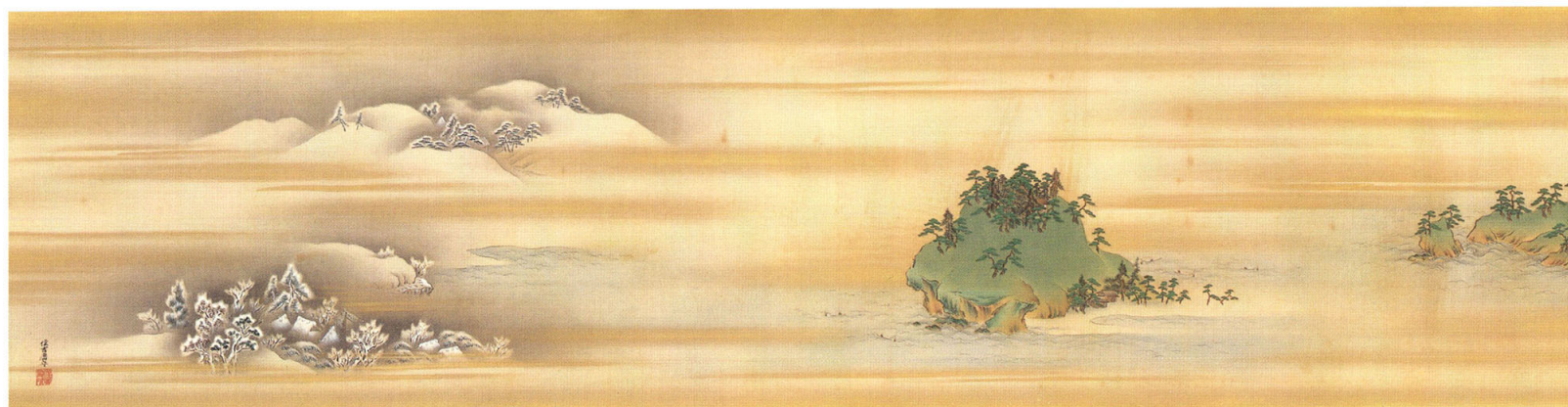




月見崎月



海濱漁火

富山暮雪

(次頁解説)

#### 4 高千穂・由布山図 田能村竹田

対幅

江戸時代、文化五年(一八〇八)  
絹本着色 各九五・八×三五・八

右には高千穂を、左には由布山を描き、九州地方の神が坐す代表的な二つの山を対としている。高千穂は、天孫瓊杵尊(たまきのみこと)の神話伝説があり、また豊後富士とも呼ばれる由布山もまた『古事記』等に登場し、古来より尊崇されてきた。

この二図を描いたのは、豊後岡藩の田能村竹田(一七七七―一八三五)で、款記より竹田数え年三十二歳の折の文化五年(一八〇八)の作である。竹田は、藩医の家に誕生し、わずか十歳ばかりで藩校の由学館に入学し、詩才を認められ、また画を学んだ。寛政十年(一七九八)には幕命による『豊後国志』の編纂係を命ぜられ、これを契機に江戸や京阪などに遊学し、谷文晁や浦上玉堂、岡田米山人、頼山陽らの多くの文人と交流を重ねた。詩、書画に秀で、さらに和歌、音楽、聞香や喫茶、瓶花を深く嗜み、文人として当時から広く知られた。

本作品は、彼の画歴の中では初期の作例にあたる。高千穂図は墨を基調として樹木の葉に淡く色を施し、山や崖は流動的な描線で鬚を重ねて点苔を繊細に布置してその表情を高める。中国の明末・清時代に見られる皴法を採り入れながら、彼の神山に対する敬虔な想いがこもった表現を創っている。上部には、岡藩の儒者・清原雄風(一七四三―一八一〇)の和歌「あもりまし初國しらすかみよ、り いや高ちほの二上の嶺」が着賛されている。

これに対する由布山は、穏やかな皴法により、青緑山水を意識しながらも色彩を押さえ、実景的に捉えた構図で描かれる。中央に美しい山が威厳高く、霊山として描かれ、その上部には、村田春海(一七四六―一八一〇)の和歌「よろつ世に神さひたてるゆふのやま そらゆく雲もふもとにそ見る」が着賛されている。春海は、江戸の国学者であり、歌人としても広く知られた人物である。

各地を遊歴して日本の豊かな自然に接し、また様々な山水図に接した文人・竹田が、神の山という厳かな主題に臨んで、実に謹厳な態度でその制作にあたったと考えられるこの二図には、風景描写を越えた独特の空気感が感じられる。

なお、本作品は、明治三十年(一八九七)に明治天皇が京都御滯在中に納庫された作品で、同様の来歴を持つ他の作品と同様、この時期に他所から買上げによって皇室に入ったものであらうと考えられるが、現在までにその詳細は明確にはなっていない。



由布山



高千穂

天化五年 二月廿四日  
 之和 畫 古堂法堂 四老画

小島は世々神志  
 しく流けうのやま  
 一帯はくすくす  
 水は

あまのついで  
 初圖 旅  
 二上  
 いやうらまの

天化五年 二月廿四日  
 田能村竹田 画

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

## 名所絵から風景画へ——情景との対話

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 76

編集 宮内庁三の丸尚蔵館  
制作 株式会社 東京美術  
翻訳 黒川廣子  
発行 宮内庁  
平成二十九年三月二十五日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sanjōmaru Shōzōkan